

2014年度大学共同研究 研究成果概要

所属・職・氏名：神学部准教授 岩野祐介

研究課題：「島国と海外との文化交流／文化摩擦に関する研究—あこがれとおそれ」

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日

研究成果概要（5,000字程度）

2014年度、大学共同研究「島国と海外との文化交流／文化摩擦に関する研究—あこがれとおそれ」においては、研究会と調査研修旅行を軸としての研究活動をおこなった。研究会については、合計4回実施しており、いずれも海外から講師を招いての研究会であることをここに特記しておきたい。また、調査研修旅行については、長崎県対馬市を調査対象として行った。

研究会

・第一回研究会 2014年 5月22日

講師 陳徳鴻先生（本研究共同研究者、香港嶺南大学人文学学部教授、関西学院大学文学部海外客員教授）

場所：関西学院会館・輝の間

陳先生は『花より団子』：東アジア圏における漫画脚色とグローバル化論」と題して、日本製テレビドラマが香港・台湾・韓国でそのまま放映、あるいは翻案されて放映される場合、現地での部分がどのように翻訳・翻案され、どう変化し、どの部分が変わらないのか、といった観点から、東アジア各国の文化的特性を明らかにする試みとしてのご研究についてお話しくださった。

主たる題材として扱われた「花より団子」では、日本での原作漫画やドラマ・映画において「お金に執着する」というキャラクターの性質がある意味で「下品」なものとして表現されているが、中国語圏においてはある種のポジティブ志向とされ、決してネガティブなニュアンスでは描かれなくなっている点など、様々な文化的背景の差異を知らされる内容であった。

参加：李恩子国際学部教授、田中きく代文学部教授、森田雅也文学部教授、阿河雄二郎文学部教授、ダニエル・ガリモア文学部教授、岩野、陳 以上共同研究メンバー

ティモシー・ツー（国際学部教授）、ヴィッキー・リッチングス（関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科） 以上メンバー外より参加

・第2回研究会 2014年7月3日

講師 Kind Kanemoto Kanto 先生（本研究共同研究者、ミクロネシア連邦・チュークコミュニティカレッジ学長）

場所：第一教授研究館 会議室1

第二回研究会は、共同研究者であるミクロネシア連邦・チュークコミュニティカレッジのKanemoto先生をお招きし、自由に討論を進める形で実施された。

ミクロネシア連邦において、大日本帝国の植民地支配時代にもたらされた日本語の語彙や、食品などの日本文化が、どのような形で現地の人々によって受容され、今現在どのようなイメージを持たれているか等々、日本との交流が与えた影響について、日本宣教師による南洋島嶼部でのキリスト教宣教についての研究をしている李からのコメントを含めつつ、お話しいただいた。特に言語的に、今でも多くの日本語の単語が日本と同じ意味で用いられているという事実は、日本においてこの事実に関する認知度が低いことも含めて、日本と南太平洋島嶼社会との関連性を再認識することを迫るものであった。大日本帝国が、島国でありながら「大陸的な大国」を目指し、島嶼部を政治的・文化的に支配しようとした事例として理解する必要があるであろう。

同時に、1947年以降、アメリカの信託統治領となってから、結果としてアメリカに依存せざるを得ないような政治・経済体制となったことや、アメリカ文化の強い影響を受けているという現在の状況についてのお話は、大陸部の大国による島嶼地域の支配、といった問題を改めて浮き彫りとするものであった。

参加：李、田中、森田、山泰幸人間福祉学部教授、岩野、Kanemoto

・第3回研究会 2014年9月16日

講師 赤江達也先生（本研究共同研究者、台湾国立高雄第一科技大学助理教授）

場所 吉岡記念館 会議室2

第三回研究会は、本研究共同研究者で、日本のご出身であり現在台湾国立高雄第一科技大学助理教授をつとめておられる赤江達也先生より、「近代日本のキリスト教受容と教養主義——塚本虎二の場合」と題してご発表いただいた。

内村門下においても天皇制・第二次世界大戦への距離感は一定ではなく、たとえば矢内原忠雄は戦争には反対であったが天皇制に対しては親和的であったと考えられている。塚本の場合は「教養主義（＝人文学的・人格主義的）」的にキリスト教を受容したことにより、結果天皇制国家による戦争に抵抗し切れなかった人物として理解されてきている。しかし、矢内原らのような戦争に反対する立場は、戦前戦中には少数派であり、多くの信徒が国家に対して従順であり静かに平和を祈るような信仰のあり方を保っていたと考えられる。

キリスト教は日本から見て海外から伝来した文化であり、日本のキリスト者は自らを異文化側におくことになる。その日本キリスト者が、日本の「伝統」としての天皇制や天皇制国家を捉えなおすことの難しさ、国家という枠組みのなかで生きているものが、自覚的にその枠組みに抗することの困難さを再認識させられるご発表であった。

参加：李、岩野、赤江 以上共同研究メンバー

加納和寛（神学部助教）、土門稔（関西学院大学大学院神学研究科）、渡部和隆（京都大学大学院文学研究科） 以上メンバー外より参加

・第4回 2014年11月7日

講師 Gary Okihiro 先生（コロンビア大学教授）

場所 吉岡記念館 会議室2

第四回研究会は、コロンビア大学教授の Gary Okihiro 先生を講師に迎え、自由に討論を進め

る形で実施された。

Okihiro 先生は Island Studies という学問分野を、理論的な面と実践・フィールド的な面の双方からご研究されてきており、大陸文化と海洋・島嶼部文化という二元論的な捉え方は、ギリシャ・ローマ時代までさかのぼることのできる古典的な世界観であると主張された。そして大陸文化であるギリシャの文化が、男性的上位概念であり、敵国としてのペルシャと結びつけられた海洋文化を劣った女性的なものともみなしたことが「ヨーロッパ」「アジア」の定義につながっていくこと、大陸文化からさらに劣るものとして島嶼部文化が位置づけられたことを明らかにされたうえで、「土地」の固有性に縛られない自由で流動的な海洋文化のあり方や、ネットワーク的な文化交流からもたらされるものを通して歴史・社会の見方を変えていくことをお話された。

一方、参加者からは、そのような「島嶼部文化」「海洋文化」という定義が、劣った文化として外から与えられた定義を跳ね返すものとして有効であることは確かであるが、しかし、逆に文化的な型をはめかえすようなことにはならないか、といった質問もなされた。それに対して Okihiro 先生は、そういった言説がつねに政治的・戦略的な文脈のなかにあることを忘れない事こそ重要であるだろう、と答えられた。Okihiro 先生の、ハワイ出身の日系アメリカ人としてのパーソナルヒストリーをも感じさせていただき、充実した議論となった。

参加：岩野、森田、李、山、田中、阿河 以上共同研究メンバー

村山由美（南山宗教文化研究所客員研究員） 以上メンバー外参加

調査研修旅行

期間 2015年2月20日から23日

訪問先 長崎県対馬市

今年度の本共同研究へとつながる、これまでの海洋文化に関する共同研究においても、島嶼部の文化・歴史・社会状況を実地において学ぶために、済州島、沖縄、五島列島等への調査旅行を実施してきた。今年度は、国境の島としての対馬（長崎県対馬市）をその対象とした。

対馬が選ばれたことにはいくつかの理由がある。ひとつは、昨今の日韓関係悪化を考え、民間の私立学校教員としてその状況をどう捉えどう行動すべきか、という問題に直面するとき、長い間日韓の中継所としてのはたらきをなしてきた対馬に、友好関係を永続させるためのヒントがあるのではないかと考えたからである。また、宗教史・文化史の面からも日本・朝鮮半島（韓国）の間に位置する対馬は非常に興味深い場所である。古代史・神話研究という面からも興味深い伝承などが残されている一方で、近現代においては海軍軍備や国防といった観点からも重要な場所となったのが対馬なのである。

具体的に訪問した場所は、下記の通りである。

・2月20日 上見台公園：山地の高台に位置する公園であり、展望台から大体の地理関係を把握することができた。同時にこの公園はかつての砲台跡であり、山へと上る道すがらではかつて弾薬庫として使用された建物なども見るすることができた。近代以降、国防上の重要拠点と位置付けられたことを実感させられるものであった。

お船江：対馬藩の使用した港である。現在では石積みの突堤が残るばかりであるが、江戸時

代の造船ドックでもあった。朝鮮半島との貿易により大いに栄えたという当時の姿を想像させるに十分なものであった。

・2月21日 対馬歴史民俗資料館：朝鮮半島との外交関係史をはじめとして、漁業史などの民俗文化史、自然史も含めた展示により対馬の歴史的全体像を知ることができた。

長寿院：雨森芳洲墓地のあるお寺である。雨森芳洲の墓地には韓国からの来訪者も多いとのことで、ラベルにハングルの書かれたお酒などが供えられている様子も見られた。日本の歴史教育において必ずしも重視されてこなかった(すくなくとも筆者が中高生であった1980年代にその名前を知らされることはなかった)雨森が、韓国の人々の間では名を知られ尊敬の対象となっている事実を確認できたことは大きかった。

和多都美神社：巖島神社のように鳥居が海上(海中)にあり、海から参拝する形態になった神社である。この神社には彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと、いわゆる山幸彦)と豊玉姫命(とよたまひめのみこと)が祀られており、記紀神話における「竜宮伝説」と関連付けて伝えられている。山幸彦は神武天皇の祖父にあたる神であり、皇室とのつながりが強い神の伝説が対馬の地に残されているということは、当時の日本中央政府が対馬を重視していたことをあらわすものではないであろうか。また極めて珍しい、三本足の鳥居も残されている。京都・蚕ノ社にも三本足の鳥居がありそれを国内唯一のものと記しているが、対馬にも存在することが確認できた。

圓通寺：圓通寺は中世まで宗氏の菩提寺であった。また、門前には第一回朝鮮通信使の一員であった李芸を顕彰する碑が建てられている。

小茂田浜神社・元寇古戦場跡：小茂田浜神社は海辺にある神社である。隣接する小茂田浜地域は元寇の際元軍が上陸した場所であり、その近辺は激戦地帯となったという。現在でも11月の例大祭の折には、武者姿の人々が海に向かって弓を鳴らす鳴弦の儀式が行われている。境内では、日露戦争の際に奉納されたという砲弾を見ることができる。

石屋根地域：石屋根は対馬の伝統的な倉庫である。一般庶民の生活に欠かせないものであった。

小船越：対馬は山が多く、山脈がそのまま海に沈んだような形状であり、陸上交通によってわずかな行き来するには不便であった。それゆえ船による海上交通が主であり、船越は船を一旦陸地に上げて、近接する別の入り江まで運ぶための、バイパスのような施設である。

2月22日 清水山城跡：現在は公園になっている清水山城跡の庭園には、当時伯爵家であった宗家と朝鮮国王高宗の娘・徳恵姫との結婚記念碑が建てられている。1931年に建てられ、戦後撤去されていたが2001年に再建されたものである。雨森芳洲の墓所同様、多くの韓国観光客が訪れる場所であるという。

万松院：宗家最盛期の菩提寺であり、壮大な墓地を有する。藩主のみならず、藩主夫人もまた壮麗な墓に葬られており、印象的であった。なお、万松院は朝鮮から江戸時代に送られたという貴重な財物を所有しているが、実に無造作に展示されていたことには驚かされた。

八幡神社：比較的新しい神社であるが、注目すべきは宗義智と結婚した小西行長の娘でありキリシタンである小西マリアがここの末社に祀られているということである。対馬は平戸や五島とくらべて非常にキリシタン関連遺跡の少ない島であるが、神社で祀られているという事実は日本の宗教性を考えるうえで興味深いものであった。

太祝詞神社：かつて亀卜が行われていたという伝承をもつ。山中にあり、現在では訪れる者も少ないように思われる。

住吉神社：豊玉姫・玉依姫・ウガヤフキアエズを祭る神社である。ここにも砲弾が奉納されている。また、近くには1861年半年間にわたってロシア軍艦が占拠した場所が残っている。

国分寺（朝鮮通信使客館跡）：かつて通信使が来訪するたびに建造されていたという通信使跡にある寺院である。

西山寺：通信使が来訪すると、外交拠点として使用されたのが西山寺である。

・2月23日には、空港より帰路についた。

実際に対馬を訪ねることで、対馬は日韓の「どちら側に所属するか」という議論は日本の（国家の、大陸国家的な概念の）産物であることが確認できたように思われる。対馬は長年朝鮮からコメを輸入してきたのであり、日韓双方との濃厚な結びつきの中で存在してきたのである。

一方、皇室と関わる神話伝承が伝えられていることから、対馬を重要な拠点として、「日本側」に位置づけておきたいという日本国家の思惑が見えてくるようにも思われる。石高のわりに宗家が特別扱いされてきたこともその一環であろう。

上述のように、日韓交流を記念する場所に、学識経験者・専門家だけでなく多くの韓国観光客が訪れ、重要な場所として認識されており、事実として、朝プサンを出て日帰りするフェリーによるツアーが人気である。滞在中も非常に多くの韓国からの観光客と出会うことになった。その一方で、対馬に自衛隊の駐屯地があるという事実も忘れてはならないであろう。島嶼部は、大陸やより大きな島国（この場合は日本）の思惑の中で、ネットワーク上のハブのような形態で存在感を発揮し、生き抜いてきたのであると改めて認識させられる調査研修旅行となった。

参加 李、森田、田中、阿河、西山（21日より参加）、岩野

なお、以上のような、研究会・調査研修旅行に加えて、共同研究メンバーはそれぞれに研究をおこなってきた。その成果の一部が、今年度刊行された『島国文化と異文化遭遇』（森田編著、2014、関西学院大学出版会）であることを、ここで改めて強調しておきたい。

研究成果概要は、データは gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください。